圓福寺報

圓福寺報　第七十九号
令和三年七月十五日発行
発行者　臨済宗妙心寺派　圓福寺
千葉市稲毛区穴川町三七五　TEL（二五一）九一八一
http://www.chiba-enpukuji.com
E-mail:oshou@chiba-enpukuji.com

観音図「清風を起こす」　京都圓福寺専門道場　蒼龍窟　加藤月叟老師

目次

	頁
ほとけさんの心シリーズ（その七）「釈迦三尊」	2
ほとけさんの心シリーズ（その八）「地蔵菩薩」	6
「僧堂で何してる？」その十　修行道場の生活	8
蔵出しスペシャル　第二弾	14
ホームページより、「庭にもみじを植えました。」「ミャンマーの軍事クーデターに抗議します。」「市原別院　薪小屋が増えました。」「市原別院　キウイの棚が完成」など	
行事編　蔵出しスペシャル	18
「禅童会」　斎藤加代子さん	18
「楽しかった禅童会」　恩田友美子さん	19
「八十八番大窪寺」　斎藤加代子さん	20
穴川花園幼稚園　園だよりから「えんちょう先生のにおいだ！」	
お寺と和尚の日録抄	22
別世帯の家族に、寺報を送りませんか？	23
墓地の空きができました。	23
令和二年度花園会会計報告	23
「人生七訓」	24

ほとけさんの心シリーズ（その七）

「釈迦三尊」

ほとけさんの心シリーズ第七回目で、ようやく本尊様のお話ができるように、脇侍仏の文殊・普賢両菩薩を安置することができました。

寺報七十八号十七ページでご紹介した「仏像詐欺」事件を経て、無事釈迦三尊のそろい踏みとなりました。

今をさかのぼること二十年ほど前にも、圓福寺の本尊釈迦三尊像を請来するご縁があり、住職在任中に二度も本尊様を請来する勝縁に恵まれたことになります。

今回は、二十年前の原稿に加筆修正をして、ほとけさんのこころをお届けいたします。

【写真】圓福寺の本尊様。向かって右が文殊菩薩で、獅子に乗り右手に宝剣、左手に経巻をお持ちです。左が普賢菩薩で、象にお乗りです。

圓福寺本尊のお釈迦様の脇侍仏（わきじぶつ）である、文殊・普賢両菩薩は、本堂再建の際に安置する予定でしたが、先立つ予算のめどが立たずに後から安置せざるを得なくなりました。

再建の決算を進めていくうちに、なんとか資金を工面できそうになったので、仏具屋さんに発注しました。ところが、以前の寺日記（2020/09/25）でもご紹介のとおり、その時に出来上がった仏像は粗悪な材料を使われて、とても納品できるようなものではないという事態が起きてしまいました。

改めて注文した仏像がようやく出来上がり、三月十五日に中国の工房を出発し、船便で日本

に到着。その後、検疫、仏具店での検品を済ませ、三月二十九日に圓福寺本堂に無事安置させていただきました。

これまで、須弥壇中央のお釈迦様の両脇の空間が広くあいていて、どうもおさまりが悪く感じられました。横綱不在の本場所が終わったばかりですが、圓福寺の須弥壇は立派な横綱はどっしり構えているにもかかわらず、大関不在といった感じでしたが、これで三役そろい踏み、ようやくお寺の須弥壇らしくすることができました。

仏像仏具の篤志ご寄付をしてくださった皆様、仏具店「放光」の方々、そして顔さえ知らない中国の仏像工房の方々、本当にありがとうございました。

早速、四月二日の月例役員会の折に、役員さんとともに開眼供養のお参りをさせていただきました。

（以上、ホームページの寺日記より）

復刻版

請来「釈迦三尊」

平成十一年寺報第二十七号より

仏教・仏像の伝来。

日本に仏教が伝わってきたのは、五三八年といわれています。（五五二年説もあり）

朝鮮半島の南東に「百済」という国がありました。その国の聖明王が、欽明天皇に仏像とお経を贈ったのが、五三八年でした。

それまでの、埴輪や土偶といった素朴な文化の日本に仏像が伝わって、当時の人々はどんな思いをしたのでしょうか。私たちが、京都や奈良、鎌倉といった古都と称される町で出会う仏像を見ると、懐かしさを感じたり、その美しさに惹かれます。仏像が伝わった時代の人は、異質の文化に出会い、何の抵抗もなかったのでしょうか。

逆に、人間そっくりに作られた仏像に対して、不気味さを感じたり、畏怖の感情を抱いたかもしれません。それは、私たちがインドなどの仏像を見て、異質な感じを抱くの似ていたかもしれません。

仏教伝来後の疫病や飢饉を、仏像のせいにしたり、お経を読んだりする者のせいにしたりしながらも、仏像は受け入れられていきます。ただし、仏教の目指す、完全な人格を目指して修行し、人間の苦を克服して、平安寂静の境地に達した仏としてではなく、災難から逃れさせてくれる偶像としての期待が大きったようです。雨乞い、疫病を祓い、大雨・長雨を止め、豊作を願い、飢饉を止め、反乱を鎮め、などなど。

それは、いっしょに伝えられた、お経という いわば「仏像の取扱説明書」をきちんと読まなかったからなのでしょう。

仏像の意味

長崎源之助さんが作った「ぼくの書いたお母さんの顔」という詩があります。ご紹介しましょう。

「ぼくの書いたお母さんの顔」

これぼくのかいた絵だよ
お母さんの顔だよ
ずいぶん目が大きいなあって
この目で
いつもぼくのすること
じっと見ていてくれるんだよ
耳も大きすぎるって
そうかなあ
この耳
ぼくのいうこと

何でも聞いてくれるんだぜ
だけど
わがままは聞こえませんよだって
この鼻ぼくに似てるだろ
それから口も
ぼく　ひとにいわれるんだよ
あなたは　お母さんそっくりねって
ぼく　こころも似るといいんだがな
あっていつも思ってるんだよ
ぼくは　お母さんが一番大好きなんだ
この絵　一生けんめい書いたんだ。

人は、ぼくが一生懸命書いたお母さんの顔を見て、目が大きいとか耳が大きいとか言います。けれど、いつもぼくのことを見守ってくれて、わがまま以外何でも聞いてくれるお母さんを一生懸命絵にするとこうなるんだよ。そして、絵には描けないけど、大好きなお母さんのようなこころを持てるようになりたいというのです。そういえば、母の日が近くなって幼稚園の教室に飾られる子供たちの絵は、目の大きなお母さんばかりだったことに気がつかされます。お母さんの目は、子供たちに危険がないか、子供たちが何を欲しがっているか、常に見通す優しい目です。素敵なお母さんの詩ですが、この「お母さん」の部分を、「ほとけさま」と言いかえてみましょう。

すると、ほとけさまはいつも手を合わす人を見守り、優しい眼差しで思いやり、わがまま以外何でも耳を貸してくれます。手を合わす自分とそっくりな姿をしているが、姿かたちだけでなく、そのこころに自分もなれるといいのになということになります。「お母さんの顔」という詩は、私たちに「ほとけさま」の、仏像の意味を分かりやすく教えてくれる詩でもあります。

圓福寺本尊請来

長い間、圓福寺の本尊様に観音様を安置してお参りをしてまいりました。圓福寺を東金から移転した時に、きちんとしていれば良かったのですが、どうやら名前だけの移転で、仏像も何もほったらかしだったようです。その後に訪ねてみると、ご本尊のお釈迦さまは行方がわからず、かろうじて遺されていた観音様をお連れして、仮にご本尊としたようです。

ここ二～三年（平成九年～十年）の「平成の大改修」をするにつけ、ずっと気になっていたのが、お釈迦さまのことでした。行方のわからないお釈迦さまを捜すすべもなく、どうしたものかと思っていた頃、ようやく改修工事も一段落したころでした。縁あって「釈迦三尊像」を新たに請来する運びとなりました。

とはいっても、日本の仏師に彫っていただくと驚くほどの高額になります。そこで、中国でってもらってはどうかとなりました。仏教伝来は朝鮮からでしたが、禅宗のもとは中国から伝えられています。中国は文化大革命で、お寺はもとより、仏像やその彫刻の技術までもがめちゃくちゃにされたとはいえ、なんらかの伝統が遺っていそうで、中国で彫られた仏像なら大丈夫だろうと、半ば言い聞かせて中国製にすることにしました。それでも、以前は中国のものはどうも？という評価がありましたので、日に日に不安が募ってきます。そんな気持ちを察してか、仏具屋さんが、中国の工房を見学に行きましょうと誘ってくれました。

渡りに舟とはこのことでしょうか。といっても、遣唐使のように舟で行くわけではありませんが、上海から国内線飛行機に乗り換えて南に約一時間半、福州市に着きます。空港から、迎えの日本製のワゴン車に揺られます。途中、車窓から見る建物は煉瓦づくりのものが多く、木造家屋は今にも崩れそうなもの

圓福寺報

グラビア特集
「圓福寺　平成の大改修」
目次は、次のページにあります。

新しくなった玄関まわり
決して敷居は高くありません。敷居のところに段差をなくしてありますから・・・。

1

が時折目に入る程度です。煉瓦を陰干ししているところや、煉瓦を焼く窯の煙突が所々に見えます。

市街地を抜けて、福州市郊外の集落の中に、その工房はありました。古くはありますが、鉄筋コンクリート三階建ての天井の高い建物。奥に進むと、小さい体育館ぐらいの広さの工房には、百人以上はいるでしょうか、職人さんがノミをコンコン叩いています。何人も群がって大きな欄間を彫っていたり、一人で仏像を彫る人、若い女性の職人さんもいます。日本の、板の間で二～三人の職人さんが、年季の入った親方のもとで仕事をしているイメージとはほど遠いものがあります。その反対に、たくさん

いる職人さんが、話し声一つたてないでコンコンとノミを叩いている様は、中国のイメージではありません。おそらく、日本からお客さんが来るから無駄話はするなと、お達しがあったのでしょうか・・・

そのたくさんの職人さんの数には、ただただ圧倒されるばかりでした。そればかりではなく、その技術の高さ・ていねいな仕事ぶりは、日本で抱いていた不安を一気に吹き飛ばすに足りるものでした。

その中国から、「釈迦三尊像」を請来して、施餓鬼会の折りに開眼供養をさせていただきました。ようやく、もともとの本尊様であるお釈迦さまをここ圓福寺に安置することができ、胸のつかえが一気にとれた感がしております。

私たちのいのちとこころ

中国の建物を見たときに、案内して下さった方がいいました。土で作った建物は、こわせばまた土に戻り、その土を煉瓦にしてまた家を建てることができます・・・と。中国四千年の歴史も、ずいぶんとサイクルが短くなったものだと妙に感心したりしました。確かに、木は育つのに何十年、何百年もかかります。木にしても、いずれは土に帰って、新しい木を育むというサイクルに違いはないのですが、そのサイクルが非常に長いわけです。ですから、中国では木は、煉瓦を焼いたりする雑木を除くと貴重品に違いありません。その大切な木を伐採して、何年も乾燥させ癖をとり、よう

やく彫刻材料となったものがたくさんの人の手を経て仏像として生まれ変わります。

そう考えたとき、かつて「中国のものは？」と首をかしげていた気持ちに恥ずかしさを覚えました。木という何百年ものいのちは、中国でも日本でも変わりあるものではありません。また、工房にいた百人以上の職人さんに象徴されるように、たくさんの人の縁で仏像となったものに、自然と手を合わせずにはいられません。

「ぼく、こころも似るといいんだがなあ」と手を合わすほとけさまは、同時に、何百年ものいのちの顕れであり、何人もの人の縁の顕れでもあります。そして、「あなたは、ほとけさまにそっくりね」と言われるように、私たちも何百年のいのちのあられであり、何人もの人の縁のあらわれであることを忘れてはいけません。

新しい本尊様に手を合わせる度に、「このお釈迦さま、一生けんめい彫ったんだよ」と中国のたくさんの職人さんの声が聞こえてきそうです。

本堂にお参りをされた折りには、こんなお話も思い出していただければ、おしゃかさまのこころに近づくことができるでしょう。

このたび、新しくご本尊「釈迦三尊像」を請来する縁に恵まれたことに、あらためて感謝して、お話を終わらせていただきます。

本尊様請来の記事をまとめるにあたり、平成十一年の寺報第二十七号を印刷原稿を引っ張り出しました。火災に遭っても焼け残った印刷原稿が、奇跡的です。デジタルデータはあるのですが、すでにそれを開くソフトが起動しないので、デジタルデータも役に立ちません。最後はアナログデータ頼りでした。

その記事中の仏像工房は、最新の本尊様を彫刻依頼した工房でもありました。二十数年ぶりに訪ねると、以前は田畑に囲まれた村の中にあったのが、高層マンション群や高規格の道路が工房まで迫っていました。しかし、工房はというと驚くほど昔のままでした。？？？と思ったら、建物は国のものだから自分たちで勝手に直すことはできないのですとのこと。そんな工房が残っていたことも奇跡的なこと、これまたご縁というのだと思います。

ほとけさんの心シリーズ（その八）

「お地蔵さん」

「釈迦三尊」に続いて、ほとけさんの心シリーズ第八回、「地蔵菩薩」をとりあげます。

お地蔵さんについては、平成五年の寺報第十三号に掲載していましたので、今回は復刻版として、加筆修正したものを掲載させていただきます。

その号では、檀徒の永田さんが寄進してくださったお地蔵さんのお話もご紹介させていただきましたので、改めて永田さんのお許しをいただき、お手紙などを掲載させていただきます。

今は亡き永田さんのご子息、

仰心宗望信士

のご冥福をお祈りいたします。

身近なお地蔵さん

「お地蔵様」「お地蔵さん」と私たちは親しみを込めてお呼びします。また、巣鴨の「とげぬき地蔵」や各地の子育て地蔵や子安地蔵、そのうえ「これこれ石の地蔵さん・・・」とか「村のはずれのお地蔵さんは・・・」などとわらべうたから流行歌までに登場して、仏様の中でいちばん親しみがあるのではないでしょうか。コンクリートで固められた都会や、宅地造成の進んだところにも大切にされているお地蔵さんを見かけることも多いものです。

ところで、身近なお地蔵さんですが、本当のお名前をご存知の方はいらっしゃるでしょう「南無地蔵願王菩薩」、その意味は悩みの多い私たちを何とか救ってあげたいという願いが、地を覆い隠すほど広く行き渡り、またその願いが仏様の中でも一番だということで、願いの王といわれています。救いに関して、質・量とも兼ね備えた仏様でいらっしゃいます。

道ばたの花・道ばたの地蔵

古い集落の入り口や街道沿いの道ばたでみるお地蔵さんは、昔から変わらないお地蔵さんですが、地を覆い隠すほどの願いというよりも地に隠される、道路補修で高くなった路面に隠されてしまいそうなお地蔵さんも目に致します。

それでも、誰があげたのかわかりませんが、お地蔵さんの前にお花が供えられていたり、どなたかがかけてあげたよだれかけをみたりすると、ほっといたします。おそらく、毎日そのお地蔵さんの前を通る人が、お供えをされて手を合わせていくのだろうと、その姿を思い浮かべながら通らせていただきます。

ところが、最近よく

目にするのは、明らかに交通事故があった場所だろうと思わせるような花束が飾ってあるところです。それを見ると、ああここでも事故があったんだな、ああここも、あそこもというぐらいたくさん花が飾ってあります。そんな中で、しばらくして通ってみると、いつのまにかお地蔵さんが立っているところがあります。その場でなくなった人の冥福を祈る気持ちが、残された人にお地蔵さんを立てさせるのでしょう。お地蔵さんがなくなった人を守って下さるとの願いを込められているのでしょう。

賽の河原のお地蔵さん

お地蔵さんというと思いだすお話が、賽の河原で石を積んでいる子どもたちを守って下さるというお話です。幼くして亡くなった子どもたちが、「一つ積んでは母のため、二つ積んでは父のため」と親より先に死ぬ親不孝を償っておりますと、せっかく積んだ石を鬼が出てきてけちらしてしまう。蹴散らかされては積み、蹴散らかされては積み、それを何回も何回も繰り返して、親不孝を償おうとしております。子どもたちは鬼が出てくる度に、お地蔵さんの袂にかくまってもらいます。ただ、お地蔵さんは子どもたちをかくまって下さるだけで、決して鬼に手を出したりいたしません。鬼をやっつけてしまえば、子どもたちは安心して石を積むことができるのですが、鬼をやっつけることはいたしません。それよりも、せっかく積んだ石を壊された子どもたちに、もう一度積んでおいでと送り出してあげるのです。何回も何回も壊されてしまえば、たいがいの子どもはもういやだと投げ出してしまうでしょう。ところが、お地蔵さんが励ましてくれて、もう一度「一つ積んでは母のため、二つ積んでは父のため」とやり直すのです。

お地蔵さんのこころ

昔から道ばたに立っているお地蔵さんは、目の前を通る人たちすべての安全を見守ってくれているような気がいたします。ある人だけを守るとか、団子を供えてくれたから守ってあげようとかいうことなく、「地を蔵す」ですから・・・。それは、何百年たってからもお花を供える人がいて、毎日おそばを通らせてもらってありがとうございますと手をあわせる人がいることでもわかります。ところが、事故現場のお地蔵さんはどうでしょうか。次第次第に忘れられて、花をお供えする人もいなくなり、まして回りの草をとる人がいるわけでもなく、草むした中にたたずんで忘れ去られるのではないでしょうか。それは、お地蔵さんがなくなった人を守るだけに立てられたものだからです。本当のお地蔵さんは、亡き人の冥福だけではなく、これから通る人の安全を願い、また安全に通らせてもらった感謝の気持ちの現れでなければいけません。そして、今日一日の感謝とともに、また明日も頑張ろうと気持ちを奮い立たせてあげようという慈悲の願いがあるのです。

望（のぞむ）地蔵

かつて、圓福寺の大きな赤松のしたに、犬を抱いた童のお地蔵さんが

いらっしゃいました。伽藍再建後は、本堂に向かって左手前に移させていただき、ペットの供養塔となっています。この原稿に続いてお手紙をご紹介させていただいく永田さんが、寄進して下さったお地蔵さんです。お手紙の中で、永田さんは、「この世に何のお返しもしないで死んだ息子」とおっしゃいました。そのお返しをお地蔵さんに託されたのだと、お地蔵さんは永田さんと永田さんの息子さんの慈悲の気持ちのあらわれなのです。永田さんが寄進して下さったわらべ地蔵に、息子さんのお名前を頂戴して「望地蔵」（のぞむじぞう）という名前をおつけしました。小さい動物をかわいがる優しさを持った息子さんだったのでしょう。お地蔵さんになって、犬・猫や小さな動物たちを袂にかくまい、そして勇気づけている姿が目に浮かびます。そんな優しさを私たちも身につけることが、望地蔵の慈悲をいただくことになるのではないでしょうか。

永田さんのお手紙

拝啓　陽春の候、皆様にはご健勝にてお過ごしのことと拝察申し上げます。

さて、長男望(のぞむ)儀去る三月五日十八時三十五分(日本時間三月六日十二時三十五分)、米国コロラド州において交通事故にて永眠、三月八日コロラド州コロラドスプリング市で現地の友人・先生などに見送られて荼毘に付し、三月十一日父親と一緒に帰国いたしました。

生前、愚息に寄せられました皆様方からの暖かいご指導ご鞭撻に対しまして心から御礼申しあげますとともに、それに対しまして社会へ何のお返しもしないままに早逝してしまいましたことを本人に代わりましてお詫び申し上げます。つきましては、早速慣習に基づいた葬儀を行い、ご厚情を賜りました皆様方にご挨拶申し上げるとともに、私たち両親としてもひとつの区切りをつけるべきであり、それが日本の美しき習慣でちることは十分承知いたしております。しかしこの度は、添付別紙にただ一人の子どもを失った親の気持ちを申し述べさせていただき、率儀については現地においてささやかながら執り行ってきたことでもあり、本人と私ども夫婦の三人だけで読経を聞きながら静かに語らい合うことでもって、率儀に替えさせていただきたいと存じます。

勝手ながら、私ども残された親の気持をご拝察いただき、生活の知恵として先人たちによりつくりあげられてきた美しき日本の伝統に、敢えて反する行動をとることをお許しいただきたくお願い申し上げます。末筆ながら、皆様方の一層のご健勝をお祈り申し上げます。

敬具

永田さんのお手紙に添えられた一文

「親よりも先立つに越す親不孝はない」と申します通り、私どもの息子は愚息でした。また、社会の荒波を知ることもなく、しかもその人生は親に甘え、社会に甘えて好きなことを好きなようにやり通してきた二十二年間であり、そんな意味では本人にとってはこんなに幸せな人生はないともいえましょう。

しかしそうは言っても、親ばかの典型でしょうか、心の中では夫婦で作り上げた唯一のしかも最高の傑作であると思っております。野辺の送りに集まってくれたアメリカの友人たちは「こんなイイ奴には二度とめぐり合えないと思うくらいにイイ奴でした」と言ってくれました。人生において最高の賛辞を与えられる場面であることとは承知しながらも、この際は親ばかに徹し、この言葉を言葉通りに受けとめ、「やっぱり私たちの息子は自慢できる息子であった」と信じていきたいと思います。

突然にアメリカに行きたいと言いだし、英語もロクに話せないままに自分で留学ルートを見つけてきて渡米したのは九十年の春でした。私どもは一抹の不安を感じながらも、一人っ子病を克服してくれるよいチャンスでもあり、今後益々進展する国際化の中で生きて行かなければならない息子を何も日本に縛りつけておくことはない、とむしろ喜んで送り出してやりました。

時々誰かに「望君はいつ帰ってくるの？」と聞かれると、「行きっぱなしかもしれないネ」と冗談ぽく答えたりもしていましたが、単なる冗談だけではなく、半分は「地球上のどこかで元気にやっていてくれればそれで良い」と思っていたのも本当のことです。

私が事現場を見た普の夕刻、大学の先生から「NozomuのMemorial-domeができつつある」と、わざわざ知らせていただきました。良く聞いてみますと、私が事故現場に花束を置いてきたのですが、そういう習慣のないアメリカ人にとっては興味が湧いたのでしょうか、その後次々と花が積み上げられてドームのようになってきたということでした。（アメリカ人特有のオーバーな表現でしょうが）このことは、息子はコロラドの土に還ってしまったのですが、別の形でコロラドの台地に蘇ったのだと信じ込みたいのです。一人の日本の男子がアメリカで死んだことにより、小さいことながらも日本の文化のひとつがアメリカの文化の中に受け入れられることにでもなれば、こんなに嬉しいことはないし、社会に対して何も貢献できなかった息子が自分の命と引き替えに最後に唯一なしえた、異文化交流を通しての社会貢献であると信じたいのです。

野辺送りの日、海抜千百mのコロラドスプリング市で見た満月は信じられないほど明るく輝いていました。今、日本へ一時帰国した息子はあの「コロラドの月」の下で新しい人生を歩むために再び出国します。今度の出国は二度と日本へは帰らない旅立ちになるでしょう。それでもいいのです。地球上のどこかで、誰にも知られることがなくても生き続けてくれていればいいのです。そう考えることが、とりもなおさず私たち夫婦の心の中で生き続け、私たち夫婦に生きる勇気を与えてくれることになるからです。だからこそ、今は私たち親子三人だけで、静かに語り合いたいのです。

親子三人だけで、静かに最後の晩餐をとりたいのです。この地球上から交通事故のなくなることを祈念しながら・・。

僧堂で何してる？

修行道場の生活

その十

僧堂下半期のアメとムチ

修行道場の下半期のクライマックスは、なんといっても十二月一日から始まる臘八大接心（ろうはつおおぜっしん）です。一日から八日までを一日に見立てる、その間は横になって寝ることは許されません。わずかに深夜二時間ほど時間、坐睡（ざすい）といって坐禅をしたまま寝ることが許されます。この接心中は、食事とトイレの時間以外はひたすら坐禅となり、別名命取りの大接心といわれます。

この大接心に向けて修行を進めてきて、無事に終えることで、新たな修行の境地に入っていくように、季節は冬至を迎えます。一陽来復と言われ、この日を境に一日一日日が伸びていくことと、修行が日々進んでいくことを重ね合わせて、冬至の前晩は一年一度の無礼講「冬夜」（とうや）を迎えます。臘八というムチと冬夜という年に一度のアメが僧堂の下半期には配されているのです。

冬夜（とうや）

無礼講

十二月中旬の前晩といえば、僧堂の雲水たちにとってはこれはまったく破天荒の一日である。一年にたった一度きりの許された無礼講だ。臘八（ろうはつ）がすめば、古参（こさん）連中はさっそくこの日のための計画や募財にとりかかり、あれこれと準備をととのえる。いよいよ待ちに待った夕べの開板（かいはん）ともなれば、会場の、趣向を凝らしてしつらえた常住（じょうじゅう）の板広間に全員が寄り集まり、韋駄天（いだてん）さまを目隠ししておいて、長い夜を徹して騒ぎ明かすわけ。「新到三年白歯を見せず」というのが日々の姿なのに、この夜ばかりは厳禁の薬水（酒）や煙草が許され、単の上下や新旧の秩序はことごとく吹き飛ばし、喜びも悲しみも、恨みも怒りもこの一夜にぶちまけて、飲みかつ歌いつづけるのである。古参も新到も、誰も彼も、まるで圧縮ボンベからはじき出された米菓子のように、とんでもない恰好になり変わって、異様な形と持味をさらけ出す。厳格この上もない僧堂規則からはまったく解放された「一陽来復」の、すさまじくもほほえましい光景が展開する一夜だ。

冬夜には、禅堂に寝起きしている雲水による寸劇や、各自の特技やかくし芸を披露したりと、なんとなく学生時代の学園祭のような雰囲気で盛り上がります。老師の歌も飛び出したりすることもあり、厳しい老師の別なお顔を見ることができる貴重な時間でもありました。

正月支度

年の瀬が近づくとともに街は活気を増してゆくが、暖気はなく、日暮れの早い僧堂は、いっこうに寂静として寒々しい。環境が変わり気分も一新されるケジメは、ここではやはり、年末年始よりも安居の境目であろう。

しかし、毎日の作務には集米手繰や般若札の新調など、新しい年の支度が加わる。そして、二十八日、二十九日ころにもなれば、歳旦祝聖行事の準備で常住は文字どおり目をまわす。まず餅つきがある。たくさんの餅米が寒水で洗われ、セイロやキネが蔵から出る。堂内衆が水を満たした土間の大釜は前晩から焚きつづける。全員午前一時開静。おびただしい数のお飾りや祝餅が、二つの臼を囲んで若者たちの手で威勢よくつきあげられてゆく。餅つきは昼前に終わり、後は恒例の煤払い。副随寮は三元展待（おせち料理）貼案に忙殺され、殿司寮は山へ若松取り、典座は〝おけら詣〟。新到にも一様にお飾りが配られて除夜の鐘を聞くばかりになると、やはり行く年を送る感慨がいやが上にも深まり来る。

僧堂の餅つき

十二月二十八日は、僧堂の餅つきでした。

当日は、いつも通り午前三時に起床、朝の勤行、朝食を済ませたら、堂内の雲水は大きなかまどが並ぶ台所の土間のところで、正月用の餅つきを始めます。

日頃、作務という野良仕事で鍛えた雲水の小気味いい杵の音が響きます。途中、餅つきが終わったら休みをくれるという話を聞いたら、なおさら杵の音もリズムも軽快になるのでした。

しかし、役付きの先輩は休みをやりたくないと見えて、力水と称して日本酒をふるまいます。そんな意地悪に屈するものかとさらに餅つきのスピードはアップして、台所は大きな掛け声に満たされるのでした。

驚異のスピードで餅つきを終え、楽しみにしていた休みをいただき、銭湯にゆっくり使ったことをなつかしく思い出します。

蔵出しスペシャル その2

コロナの影響で、お寺の行事も中止になるものが多く、みなさんとお会いする機会が減って寂しい限りです。

お寺のホームページという蔵の中から、寺日記・市原別院日記、まだ寺報に掲載していない園だよりからのお話などを蔵出しする第二弾です。

新型コロナ禍のお寺がどうなっているか、和尚さんはなにをしているかなどをお読みいただければ幸いです。お寺のホームページにも、アクセスしていただければ重ねて幸いです。

庭にもみじを植えました。

2021 年 03月 23日

山門をくぐったところの左右に黒松を植えていたのですが、左側の大きな黒松が松くい虫にやられて枯れてしまいました。去年あたりから松くい虫の被害が増えていて、また松を植えるのはどうかと思い、もみじを植えることにしました。

別院に植えてある紅葉は枝葉が広がっているものばかりで、この場所にはそぐわないので、植木屋さんに探してもらったもみじを植えることにしました。

職人さん三人がかりでようやく植えられるほど、根がしっかりしたもので、植えこんだ後の根本もきれいに元通りにしてくれたので、前から植わっていたような感じです。

葉が茂って、枝が広がってくれたら庭のシンボルツリーになることでしょう。また、秋の紅葉も楽しみです。

落葉樹が増えたということは、秋の落ち葉掃きはさぼれないということ・・・か？

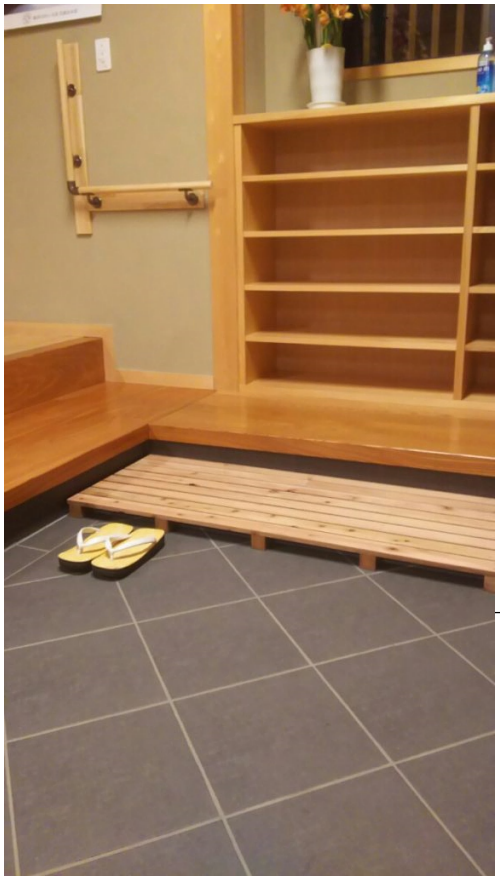
玄関に手作りすのこを敷きました。

2021年03月24日

お寺の玄関を上がるところは少し高さがあります。靴を脱いで上がったら、膝をついて靴を持って下駄箱に入れる、というのが玄関を上がるときの所作なのでしょうが、お年寄りには膝の曲げ伸ばしが負担になるので、すのこを敷いて、膝をつかなくとも履物を持てるようにしました。そういえば私自身も、式台の上から履物をとるのが少し大変になってきましたので・・・。

そうそう、再建工事の残材をたくさんいただいたと思い出し、その中からすのこに使えそうなのを引っ張り出して、DIYすることにしました。ちょうど杉材のいいのがありました。ヒノキや集成材もいいのですが、それでは重くなってしまいますので、玄関掃除のたびにやっかいだなと思っていたので、軽い杉材はうってつけなのです。

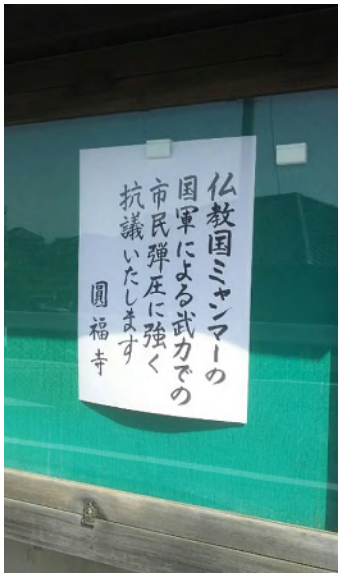
計っていった寸法に合わせて作るのですが、桟木の間隔や本数などを出すときには、小学校の算数をもっとまじめにやっておけばよかったと反省しきり。ようやく間隔と本数を割り出し、いよいよ板を張っていきます。たかがすのこと侮るなかれ、桟木と板とをきちんと直角に張らないとみっともない出来上がりになってしまいますので、さしがねを使って直角を確認しながらビス止めしました。



残材ですから節があったり、節が抜けているところがあったりします。もっといい材料を使えばいいのにと言われたら、スギ材だけに、「ワイルドだろう一。」と答えることにします。このギャグ、わかるかなあ、わかんねえだろうなあ・・・。

ミャンマーの軍事クーデターに抗議いたします。

2021年04月20日



お寺の掲示板に、ミャンマーの軍事クーデターに抗議する声明文を張り出しました。

ミャンマーの軍事クーデターが2月1日に起こってまもなく3か月になろうとしています。昨日は、日本人ジャーナリストが拘束され刑務所に収監されたというニュースが流れました。

国会議員の軍人が占める割合が高く決まっていたり、数多くの少数民族、かつてイギリスがインドから移民させたロヒンギャなど、たくさんの問題を抱えている国ですが、仏教国として国民は熱心な仏教徒ばかりです。かつて訪ねたときに、お寺にはたくさんの人がお参りに訪れ、熱心に礼拝している姿に感心させられました。

クーデターを起こした国軍の一人一人も、軍政に反対する市民一人ひとりも、あるいは少数民族の人も、敬虔な仏教徒同士なのです。日本も戦国時代には仏教徒同士、同じ国民同士の殺し合いがあったので言えた義理ではないかもしれませんが、一人ひとりに思いをいたせばお互いに仏教の教えをいただく仏教徒同士なのです。「不殺生」を掲げる仏教徒同士、武力による拘束や死傷者を出すようなことがあってはいけません。そんなことをしておいて、お寺に出かけて、来世はより良い世界に生まれ変われますようにとお願いするのは虫がいいことこの上ありません。

どうか軍事クーデターが収まって、平和な仏教国に戻ることを願っております。

ミャンマーという国のキャッチフレーズは、タイと同じく「微笑みの国」です、

新型コロナが収束し、軍事クーデターが収束したら、また訪れてお寺巡りをしながら、現地の人たちと微笑みを交わしたいものです。

庭の苔を張り替えました。

2021年05月15日

伽藍再建工事に伴う庭づくりで張った苔がなかなか根付かなかったので、植木屋さんが新しい苔に張り替えてくれることになりました。

苔庭のあちこちに霧吹きの散水栓を設置して、まんべんなく水分がいきわたるように、朝晩三十分ずつ散水をしていたのですが、巣作りの鳥がついばんでいったり、乾燥が進んだ時に強風で飛ばされてしまったりして惨憺たるものでした。

今度の苔シートは、いろんな種類の苔が混生しているものだそうで、根を張るもの、地表に張り付くものなどが混じっています。そのうちの環境に適した苔が繁茂していくはずと考えているのですが、果たして、今度は根付くのかどうか、これから迎える梅雨や暑い夏が正念場だと思います。

薪小屋が増えました。

2021年03月01日

雑木林の倒木もあらかた片付き、薪が増えました。すでに既存の薪小屋は満杯だったので、すぐわきに薪を積んで、雨除けの波トタンを張って急ごしらえの薪小屋ができました。これで何年か分の備蓄燃料を確保したことになります。

これだけ雑木を切ったということは、森の備蓄が減ったということになります。自然界ではどんぐりが落ちて芽が出て、森が更新していくのですが去年の秋はドングリが不作で、落ち葉集めをしていてもドングリを目にしませんでした。今年の秋のドングリの収穫に期待して、苗木を育てて雑木林の保全に努めなければと思っています。

キウイの棚が完成しました。

2021年02月25日

畑の入り口、流し台を覆うようになればと植えたキウイですが、だんだん大きくなってきたので、本格的に棚を作りました。

材料は基本的に足場用の鉄パイプですが、太く見える材料は電気の引き込み線用の電柱です。電線を地中に埋設したので余った電柱を再利用しました。

そういえば東京都知事の小池さんが、電線を埋設して無電柱化なんていうことをおっしゃってしましたが、コロナに振り回されてそれどころではないんでしょうねえ。市原別院はすでに無電柱化を実現しています。

いえいえ、キウイが成長して葉っぱが茂り、棚に使っている電柱を覆い隠さないと無電柱化って言えないかもしれません。

暑い夏に、木陰を作るほど大きく育ってほしいと願っています。そして、秋にはたわわに実った実の収穫が楽しみですが、同時に剪定の仕事が増えることにもなります。「あ～、また仕事を増やしてしまった。

じゃがいもの植付。

2021年03月05日

予定では、幼稚園恒例の親子ボランティア「Q園隊」でジャガイモの種芋を植えるはずだったのですが、新型コロナの緊急事態宣言中なので、「Q園隊」はやむなく中止になりました。

とはいえ、令和3年度の幼稚園の子どもたちの活動で、じゃがいも掘りが予定されているし、子どもたちが「たんけん隊」に来た時のお味噌汁の材料にもなるジャガイモを植えないわけにはいかず、一人黙々と植付をしました。種芋20kgぐらいかと思います。広い畑ですから、3列半ほどの畝になりました。1畝何メートルなのか、今度測ってみようと思います。

大変そうな作業に思えるでしょうが、さにあらず、まずは1週間ほど前に、苦土石灰と元肥の有機肥料をまいて、トラクターでガーッと耕します。植付の前の日に、管理機と呼ばれる小型耕運機で畝を作っておきます。上手に畝立てができていれば、あとは種芋をどんどん並べていくだけです。並べ終えたら、上から土を優しくかけてやれば、下の写真のようにきれいな畑が完成します。ものの一時間もかかったでしょうか？我ながら、手際よさに満足満足！

そんなに簡単にできるなら、なにも「Q園隊」なんかに頼まず、毎年やって！と言われそうですが、「Q園隊」はボランティアと称した体験活動ですので、本当は親子でにぎやかにやってもらいたいということをご理解ください。

あとは種芋の成長力、太陽や雨などの自然の力で、無事芽を出してくれることを祈って、畑を後にしました。

行事編 蔵出しスペシャル

コロナの影響で、お寺の行事も中止になるものが多いのですが、これまでいろいろな行事やイベントを行ってきました。

それにまつわるお話をご紹介して、あんな行事こんなイベントなどを思い出していただければと思います。

コロナ後に、いろいろな行事が継続して開催できるようにとの願いを込めて・・・。

禅童会

（平成十八年七月二十五日 ふだん記千葉）

斎藤　加代子

千葉市稲毛区にある臨済宗妙心寺派圓福寺で、毎年夏休みを利用した、一泊二日の小学三年生から中学生を対象にした禅童会がある。日常縁遠いお寺の生活を体験してみようという催しである。今年は夏休みに入るのが早く、七月二十二、二十三日となった。小学二年生の時から参加している孫のくるみも今年は三回目となり、すっかり慣れてしきりと世話を焼いている。初参加の年は、かなり緊張して、緊張のあまり食事中に気分が悪くなり、横になって休む状態だった。今年も女の子が一人、食事がとれず休んでいた。

その気持ち、痛いほど分かる。警策を持って和尚さんがゆっくり、ゆっくり、一歩、一歩、自分の方へ近づいて来る時の緊張は、子供にとっては物凄いものだと思う。大人の私でも、何年経っても警策が回ってくる時の緊張は、格別である。三十分の坐禅を二回して、次は般若心経のお経の練習である。初めは蚊の鳴くようなか細い声も、何度も何度も練習しているうちに自信がつき、声も出るようになり、高らかと唱えられるようになる。一番大変なのが、食事の作法である。これば かりは、いつも家でしているのとは全く違うので、緊張と戸惑いの連続である。大中小の器と箸を布巾で包んである持鉢（じはつ）というのを持って、食台の前に坐る。食事は決めごとが多く、覚えるのが難しい。今戴こうとしているこの食事には多くの命がある。その命を戴いて、私たちの命は生かされている。食事五観の偈を読み上げる。あとは無言の中で進んでいくのだから、気が抜けない。

家庭での、日常の食事は、テレビをチラチラ見たり、一日の出来事を話したり、賑やかな食事をしていることだろうが、ただただ音を立てず、黙々と食べる。これが禅寺の生活の基本だ。皆真剣で、可愛い。だが、ほとんどの子の姿勢が悪い。背筋を伸ばして食べ

ている子は少ない。肘をつき、背中を丸め、テーブルにもたれ、自分の体をしっかり支えられない。腰が座らないのだ。

神妙な雰囲気の中での食事も終わり、解放されれば、普段の子供達に戻る。本堂はさながら遊び場になる。一番の楽しみはスイカ割りだ。隣の幼稚園の園庭で、特大のスイカを割る競技は、生き返ったように輝き、無我夢中で自分たちの班の応援をする。割れたスイカは格別の旨さである。

地蔵盆で使う灯篭の絵を描くのも楽しい。それぞれが将来の夢を書き込む。お金持ちになりたい子。タレント、サッカー、野球の選手。くるみはパン屋さんになりたいと書いていた。夏の短い体験の中で学んだ、純な心を忘れないでほしい。

最近の殺伐とした世の中にあっても、それぞれの夢を胸に、健やかに育ってほしいと願うばかりだ。

楽しかった禅童会

（平成十四年感想文集より）

草野小五年　恩田　友美子

わたしは禅童会にくる時、坐禅がドキドキしました。足をあぐらのようにくみ、かたひざをはんたいのひざにのっけて、せなかをピンッとのばしたかっこうなので、去年は大変でした。今年はおしょうさんが、弱虫くんとしっかりくんの話をしてくれました。それから坐禅をしました。わたしの中で弱虫くんとしっかりくんが、いろんなよびかけをしていました。弱虫くんは、「他の人もちょっと動いたりしてるから、少しぐらい動いてもだいじょうぶ」とよびかけているようでした。しっかりくんは、「他の人が動いてるからって、まねしちゃだめだよ」。わたしはどうすればいいかと思って、そのことばっかり考えていました。「チーン」とその時かねが鳴りました。そしてひょうしぎも二回すごい音を出して、鳴りました。わたしは終わった時ほっとしました。足がいたくて、びみょ～にむずむずしました。なので、終わってほっとしたのです。次に楽しみだった事はお経です。わたしは、去年禅童会にいって、しおりを家に持って帰った時、ちょこちょことお経を読む練習をはじめました。なので、摩訶般若波羅蜜多心経は、見なくてもいちおう読めるようになりました。なので、お経の練習を（読む）する時間が楽しみでした。お経の次に楽しみだったのは、うどん作りです。わたしが包丁を使った時は太くなってしまったので、（うどんが）切るのになれてないと大変だなと思いました。わたしはこのごろ、包丁を使ってないので、そう思いました。そしてうどんを作り、食べることになりました。自分たちで作ったうどんは、おいしかったです。自分たちでうどんを作るのに大変だったので、食べ物を作ってくれる人たちの努力がわかりました。なので、これから家にいる時も、食べ物をごはんつぶも残さず、キレイに食べようと思いました。禅童会にきて、いろんなことがわかりました。2日間とても楽しく、いろんなことを学びました。来年もまた禅童会にきたいと思いました。　おわり

八十八番大窪寺

（平成十九年三月　ふだん記千葉）

斎藤　加代子

平成十九年二月十九日朝八時、遍路にしては遅い出発だ。志度寺を出て、今日のゴールであり、四国遍路のゴールでもある八十八番大窪寺へ向かった。昨日の雨が未練がましく、まだ少し残っている。遍路も回を重ねるごとに、歩き上手になっている。天候に左右されることもない。雨が降れば合羽を着、暑くなれば一枚脱ぎ、寒ければ一枚重ねる。流れる汗は、首に巻いたタオルで拭う。ただそれだけのことである。志度寺を出てから約四時間、途中長尾寺を経て、前山ダムを過ぎると、「お遍路交流サロン」がある。ちょうど昼食の時間である。一行二十人は温いお茶を頂き、やれやれホッと一息。広いサロンに荷を下ろし、夕べの旅館のお接待のおにぎり弁当をほうばる。

交流サロンには明治時代からの遍路の資料などが展示されている。投句箱があったので、一句作ってみた。

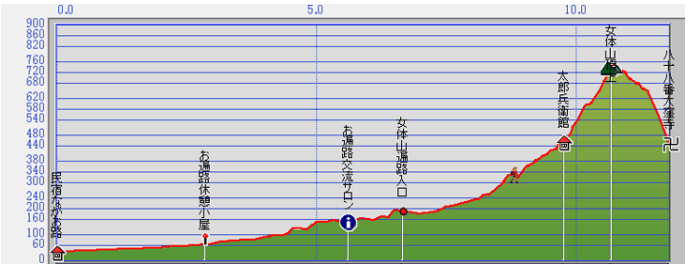
丸出しの吾に我あり遍路かな

四国の山の中に、見え隠れする、八十八カ寺の模型があった。歩いた後を迎って見ながら、感慨に耽っていたら、「さあ出発」の声。思いは断ち切られた。これからがいよいよ八十八番へ。心を引き締めて、身支度を整え、遍路道を歩き出す。山道に入ると、誰彼となく言葉が少なくなり、黙々と歩くことで精いっぱいになる。まさに歩く禅である。

やっとのことで峠に立ち、後は下りと、内心喜んだのもつかの間、この山のもう一つ向こうの山が女体山だと住職が指をさす。何だか一気に力が抜けて、疲れが出たような気分になったが、そんなことに構っている暇はない。次への一歩を進めなくてはならない。後には引けない。女体山の麓から、頂上へと進んでいくとびっくり仰天である。全く予期せぬ場面が待ち受けていた。霧のお蔭で、谷底が見えないのが救いだった。晴れていたら、その深さに足がすくんで、多分怖 怖くて、動けなかったかもしれない。南無仏。南無仏。この岩と岩の間を抜けて先に行った人たちの、微かな形跡が残っていた。金剛杖に無事をお願いして、岩に這いつくばって登る。短い脚では、岩にかけるのも大変だ。後ろからIさんがやはり不安を抱えながら続いていた。七百六十六メートルの山に、こんなに大変な岩場があるなんて誰も予期せぬことだった。女体にしては険しい。何はともあれ、ようようにして八十八番大窪寺に辿りついた時には、納経の時間すれすれになっていた。先に到着していた人達が拍手で迎えてくれた。

最後の大窪寺に着くまでの山道の長かったこと。着きそうでなかなか着かず、緩やかな道に安堵していると、突然険しい岩場がやってきたり、道なき道を一歩一歩踏みしめて歩く姿は、人生そのものだ。また人間の最期、死とはこのように、予期せぬ時に突然やってくるものなのかもしれない。やはり遍路は人生そのものなのだ。こうして十年にわたる私の四国八十八カ寺遍路の旅は、多くの思い出を残して無事に終えることができた。

深謝合掌



えんちょう先生のにおいだ！

（令和三年二月の「園だより」から）

決してコロナに感染しているわけではありませんが、私は嗅覚異常です。それは、以前発症した顔面まひのせいで、嗅覚神経がおかしくなっているのだと思います。朝のお参りの時のお香の香りも、朝の入れたてコーヒーの香りもほとんどわかりません。とはいっても、完全に嗅覚がマヒしているわけではなく、たまに回線が通じるように、においを感じることもあります。そんなとき、お香のいい香りやコーヒーのいい匂いに、なんか豊かな気持ちにさせられます。

今年の冬たんけんのお味噌汁の具材は、なんといっても年長さんが育ててきた「だいこ～ん」です。この大根を煮る匂いも、私には感じることができません。

立ち上る湯気がこもらないようにガス台前の窓を開けておくと、お味噌汁が煮える湯気が外に流れ出ていきます。ちょうどそこに、畑仕事を終えて雑木林に行こうとする年長さんがやってきました。すると、男の子が言いました。

「えんちょう先生のにおいがする！」

???、昨日もちゃんとお風呂に入ったし、私のにおいが一〇ｍも先の子まで届くはずはないし???。なんと、えんちょう先生のにおいだといったのは、お味噌汁の野菜が煮える匂いだったのです。

季節ごとに出かけるネイチャーランドのたんけん隊で食べる、園長手作りのお味噌汁の印象が、その子の頭にインプットされていたわけです。お味噌汁のにおいイコールえんちょう先生・・・と。

ふるさとを思うとき、おふくろの味を思い出すと言ったりします。お雑煮には地方色があったり、各家庭の味があったりします。

「薫習」（くんじゅう）という言葉があります。手取り足取り教えたり、ことばで教えたりしなくても、同じ環境にいると自然と身につく、そんな学習スタイルのことを言います。おふくろの味、家庭の味というのも「薫習」という家庭教育の一つなのだと思います。

外出自粛で、ウーバーも出前館もテイクアウトもいいですが、たまにはじっくり家庭の味に挑戦してみてはどうでしょうか。「おかあさんのにおいだ！」という手料理はなんですか？

令和三年上半期 お寺と和尚の日録抄

1月
1日　新春ご祈祷
1日～3日　修正会
8日　幼稚園、始業式
15日　幼稚園、年中組市原たんけん隊
18日　幼稚園、年長組市原たんけん隊
19日　花園会新年会
22日　幼稚園、年少組市原たんけん隊
28日　幼稚園、会計監査
29日　スマートコミュニティ、「写経会」
2月
2日　幼稚園、節分
11日　スマートコミュニティ、「写経会」
16日　幼稚園、涅槃会
25日　スマートコミュニティ、「写経会」
3月
11日　東日本大震災慰霊法要
14日　春彼岸法要（塔婆供養のみ）
16日　幼稚園、卒園式
25日　スマートコミュニティ、「写経会」
29日　文殊菩薩・普賢菩薩安座
4月
10日　幼稚園、入園式
17日　放牛窟老大師七回忌　於埼玉平林寺
22日　スマートコミュニティ、「写経会」
5月
7日　月例役員会
13日　スマートコミュニティ、「写経会」
14日　幼稚園、年中組市原春たんけん
15日　本堂前、苔張替え作業
17日　幼稚園、年長組市原春たんけん
28日　幼稚園、年少組市原春たんけん
6月
1日　幼稚園、決算監査
11日　幼稚園遠足、於市原別院

新型コロナウイルスの感染予防のために、各種行事が中止や延期になり、また外出自粛が叫ばれてお寺に訪れる人も少ないのをいいことに、市原別院での作務に集中できた上半期でした。

上半期の市原別院での成果は、キウイの棚の完成、枝垂れ桜の支柱の完成、石畳工事が進展したこと、園児用シャワーコーナーの移設、園児用プール前のデッキ工事完了です。それ以外に、日常的な仕事として、じゃがいも・さといも・さつまいも畑の耕運や周囲の草刈り、ユキヤナギ・レンギョウ・梅の木の剪定、雑木の伐採と薪つくりなどに取り組みました。

また、幼稚園の親子遠足を中止にしたので、子どもたちだけの遠足になってしまいましたが、その遠足の様子をビデオ編集して保護者のみなさんに配布したりもしました。

遠足ビデオの表紙

廃棄された石で作った石畳

プールデッキとシャワーコーナー

新緑の市原別院

日曜会

日曜朝の勤行と坐禅、そして少しの庭掃除。一週間の始まりをお寺でスタートさせてみませんか？

【日時】
毎週日曜日
午前六時～六時四十分　勤行
～七時　坐禅
～七時半　随意坐
～八時　庭掃除

【会費】
特になし

【その他】
服装自由
申し込み不要

茶禅会

土曜会

休会中

別世帯の家族に、寺報を送りませんか？

別世帯のご家族に寺報を送って、お付き合いのあるお寺のことを知っておいてもらうようにしてはいかがでしょうか。送料は、お寺や花園会で負担いたします。

ご希望の方は、送り先のご住所、お名前、続き柄をお寺までご連絡ください。

墓地の空きがあります。

墓地を移転される方や永代供養塔「涅槃精舎」に改葬される方がいらして、空きができました。ご希望の方は、お寺までお申し出ください。

【広さ】
五尺（一五　cm）×三尺（九　cm）
【区　画　数】
二区画
【永代使用料】
一〇〇万円
【墓地管理費】
年三千円
【花園会費】
年一万円

（どうしても広い区画をご希望の方は、お寺までご相談ください。）

令和２年度　圓福寺花園会　会計報告

令和２年４月１日～令和３年３月３１日

	科　目	金　額	備　　考
歳入	前期繰越	249,950	
	お寺より活動費	1,620,000	
	行事収入	57,900	写経会・茶禅会の参加費を含む
	雑収入	8	預金決算利息
	歳入合計	1,927,858	

歳出	行事費	241,294	
	宗派賦課金	175,500	本山納付花園会費ほか
	事務費	164,504	行事案内状の印刷費・郵送料など
	会議費	19,465	月例役員会ほか
	寄付金	1,000,000	コロナ禍で行事縮小のため圓福寺へ寄付
	歳出合計	1,600,763	

差し引き残額の　¥327,095　は次年度繰越金としました。

「人生」七訓

1. 人生はたった一度きり

「あの世がある」なんて言う人もいますが、行ってみなければわかりません。とにかく、この世の人生は一度きりです。この世で幸せになりましょう。

2. 人生に定年はない

会社や組織には定年がありますが、人生の定年はありません。人間、死を迎えるその一瞬まで、人生の現役です。

3. 人生の主人公は自分

「おしっこがしたくなった。でも今忙しいから、誰か代わりに行って！」

これはできません。人生も同じです。自分が主人公になって生きていくものです。

4. 人生は各駅停車の旅

人生は片道切符の旅です。ならば、各駅停車で行きましょう。特急に乗ったら通り過ぎてしまう風景を、しっかり見ておきましょう。ゆっくりだから充実するのです。

5. 人生は出会いの日々

80歳まで生きても、心の底から「この人に会えてよかったなあ」と思える人の数は、およそ２００人とのこと。ならば、ひとたびひとたび、ひとりひとりとの出会いが、ありがたく、尊いですね。

6. 人生はひとりでは生きられない

自分一人の力で生きていると思ったら大間違いです。多くの人や物に支えられ助けられての人生です。ひとりでは生きられません。迷惑をかけたり、かけられたり……それでいいのです。

7. 人生、今を悔いなく

「過去を追わざれ。未来を願わざれ」

お釈迦さまの教えです。

〝今日ただいま、今の今に徹して充実した人生を歩みなさい〟とのお示しです。今、今、今の積み重ねが「今日」になり「明日」になり「人生」になるのです。

「ぱんたか」施本より転載させていただきました。